

天眼

光秀

㊦
天眼てんげん

明智光秀風水綺譚
あけちみつひで ふしずい きたん

戸矢とや

學がく

(扉裏)

「彼は裏切りや密会を好み、刑を科するに残酷で、独裁的でもあったが、己れを偽装するのには抜け目がなく、戦争においては謀略を得意とし、忍耐力に富み、計略と策謀の達人であった。また、築城のことに造詣が深く、優れた建築手腕の持ち主で、選り抜かれた戦いに熟練の士を使いこなしていた。」(ルイス・フロイス『日本史』松田毅一他訳)

諏訪社

諏訪湖の湖面に朝靄が棚引いていた。春の気配はそこかしこに見られたが、ようやく凍結から解き放たれたばかりの湖の水は、一見するところまるで結氷しているかのようだ。ついこの前までは白濁した凍える姿であったものが、今は澄み切った鏡面のようになつて静まり返る。ほとんど無風で無音の世界に、守屋山の原生林からゆつくりと流れ込む濃厚な朝靄が湖面に満ちて行く。さながら神々の呼気のように。

湖岸から南へわずかに入ったところに鎮座するのは諏訪大社本宮である。背後の守屋山を依り代の神奈備として古よりこの地に鎮座する。改築成った社殿の白木の香が春の冷気にかぐわしい。二度目の川中島決戦を控え、その戦勝祈願をも込めて、信玄は拝殿と回廊を寄進した。この日は、その落成の大祭である。

拝殿前の境内も参道も武田家の家臣団がぎつしりと埋め尽くしている。全員が軍装に身を固めているが殺気はなく、静かに拝跪している。ときおりそこかしこで馬の嘶きが真つ白い呼気とともに立ち上がるが、声を上げる者は皆無である。

信玄とともに拝殿に昇るのは十数人の重臣たち。彼らは烏帽子姿の礼装である。その最後尾に従う長身の若者は、一人白装束である。阿智桃丸という。まだ十九歳でありながら、陰陽道の鬼才としてすでにその名は早くから信玄の耳には届いていた。信玄がこの若者を都から招いたのは、この度の諏訪大社への参拝に深く関わっている。

しんと静まり返る拝殿に、大祝の朗々たる祝詞の奏上が響きわたる。すでに祭祀は佳境に入っている。

諏訪大社本宮は、前宮・秋宮・春宮とともに諏訪湖を囲み、四つの宮全体で諏訪大社と呼ぶが、その中核はもちろんここ本宮である。信濃・甲斐を中心にその神威は広く浸透しており、この地を統治するには諏訪神の加護は不可欠である。惣領家の諏訪氏は先年武田に敗れてすでになく、大祝家のみが祭祀織として今は武田に仕えている。

大祝に促されて信玄が玉串を神前に捧げる。信玄に合わせて、重臣一同の拍手が二度、拝殿に高鳴る。

祭祀の後は、直会へ。巫女の捧げる丙子から白磁のかわらけに神酒を受ける。

拝殿から降りた信玄は、一段高みの玉垣内から家臣団を睥睨した。傍らに居並ぶ重臣たちは片膝をつく。

「これにて、我らは諏訪神の加護を得た。これより向かうは川中島ぞ」

一斉に鬨の聲が拳がり、辺りの冷気を震わせた。

諏訪社は一般の神社と趣が異なり、四つの社から成っている。これら四社を併せての総称が諏訪社である。四つの宮はそれぞれに東西南北を向いているのだが、なかでも本宮が北向きであるところに重大な意味がある。

この神、建御名方神を祀る者は、国津神の血脈を意味するのだ。大国主神の息子であつて、無双の武力神であり、東国での神威は格別のものがある。甲信の地は、古来この神の統べるものである。甲斐武田が諏訪氏を滅ぼして手に入れようとしたものは単に領地領

民のみではない。むしろ諏訪神を我がものとすることによって領地領民は当然として武田に帰属することとなり、なおかつ諏訪神は東国全域に号令するだけの権威をもたらすのだ。諏訪神の取り込みは、かねてよりの信玄の野望に不可欠であった。

また、信玄は戦国の雄として「天下取り」を決意するにあたり、武門の名流たる清和源氏を公称することとした。天津神である皇統への偽装、変装である。同時に諏訪大社への多額の寄進をおこない、源 信玄晴信みなもとひしげんはらののぶとしての祈願祭を大々的に挙行した。

これら一連の策をもたらしした者こそは若き陰陽師の阿智桃丸である。

桃丸がとくに意を注いだのは、諏訪本宮の社殿が北向きであるという決定的な事実を、拝殿や回廊の大幅な修改築によって変えてしまおうとの目論見であった。

皇統に連なる神は、南面する。稀に東面するものもあるが、神坐は、南向きに鎮座するとは原則である。神坐に倣えばこそ、玉座も南面している。

ところがあえて北向きに祀られた神社もあって、その中の一つが諏訪本宮である。古き神、国津神を封印するための方術であるが、その真相を知る者はもはやほとんどいないだろう。しかしその神威を天下に甦らしそうとするならば、社殿の封印を解かなければならない。祀り直しをせずに、社殿の改築で気を逸らす、すなわち風水術による化殺けさう建築である。化殺とは、凶の運氣を吉へと変える秘術である。信玄は、これを求めた。改築成った社殿は、神坐はそのままだに、拝殿を東面とし、回廊参道は南から入る造りとした。これで諏訪本宮は、皇統に倣けたのだ。

古社というものはもともと地理風水術によって定められている。界隈の峰々に走る龍脈という大地の力の流れを探り、その力が集まって噴き上がる龍穴を見出して鎮座地と定める。そこに降臨する祭神に相応しい社殿を形造るのも、その術を措いて他にない。

ちなみに仏門にはこれらの技能がなかったために、多くは古社を盗んでその上に本堂を建てた。謙信と争闘の種にもなっている善光寺も、もとは古い社があったところに建つものであり、その土地が持っている聖なる力を利用してしようとして始まったものだ。全国のいわゆる「仏門本山」と称する場所も、おおむね同様である。信玄に招かれてすぐに桃丸は善光寺の界隈を相地そうちし、尋龍じんりゅう点穴てんけつの術をおこなった。龍を尋ねて穴を点す すなわち地龍をたどり、龍穴を見定める方術である。するとやはり見当をつけていた通り、善光寺本堂の建つ場所は龍穴の中の龍穴、太極たいごくであって、本来ならば宮居か城郭の中心となるべき場所であった。

「お屋形様、なによりもまず善光寺を破壊なされませ」

桃丸の最初の大きな教示は、一瞬の沈黙の後、囂々たる非難となった。

「おのれ何を申すかつ」「言つに事欠き血迷つたか」「くそたわけめが」

並み居る重臣たちの中には立ち上がり喚く者までいる。

しかし信玄は落ち着いていた。

「まあ待て、静かにいたせ。この智恵者はゆえあつて儂が招いた者じゃ。なにはともあれ訳を聞こうではないか。桃丸、臆するな。話せ」

信玄の一声でさしもの老臣重臣たちもしぶしながら威儀を正した。桃丸はその様をしばし見渡して、信玄に目を移す。信玄があらためて力強く頷いたのを受けて、桃丸はおもむろに口を開いた。

「畏れながら申し上げます。

善光寺平と呼ばれるこの地は、四神相応の整う理想の地

にござります。その昔、天武天皇十三年（六八四）、新たなる都の地を求めるにあたって二つの一つとして視察せしめており、都を飛鳥浄御原宮に定めてのちは行宮が嘗まれた所にござります。その後、建御名方の神を祀る社といたしておりましたものを、仏門が盗みたるによりて善光寺の伽藍が被せられる仕儀となったようござります。しかしながら、この場所こそはお屋形様の住居せらるべき場所にて、この地を押さえた者こそが真の勝者となります」

「ほう、おもしろい。つまり、今は坊主どもが勝者というわけか」

「そのはずにござります」

一座を沈黙が支配した。

「ならば、蹂躪してくれよう。景虎ずれが欲しがるとも、由縁はそれか」

しかし越後との奪い合いは一進一退を繰り返して、善光寺界隈は荒れ果てることになる。

機を見て信玄は、本尊の阿弥陀三尊像を甲府へ運ぶが、本堂跡地の奪い合いはその後も決して着がつかず、荒れ果てるままに放置された。

後のことであるが、本尊は勝頼の死後、信長によって岐阜へ運ばれ、さらに秀吉によって京の都へ遷され、更には家康によって尾張へ遷される。そして慶長二年（一五九八）ついに元の地へ帰される。永く荒廃したままであった寺域は家康の全面的な支援によって復興することになる。とはいっても、家康に特別な信仰心があつたわけではないだろう。仏門に盗まれたこの聖地は、まさにこの地の要である。神威の復活は、ここに再び一大勢力を生み出しかねない。それゆえ家康はこのまま神威を押さえ込む途を選んだのだ。管理しやすい仏教を徳川幕府の治世に利用しようという意図がすで見える。政略によって、はからずも仏門の霊地は保証され、そのまま地神は封印された。

これに対して諏訪の地は仏門の強奪をくぐり抜けた。その祭祀を司る大祝家が守り抜いたことよっている。ただ、仏門との習合は進み、社殿建築には次第にその影響が反映されるようになる。

しかしこのたび信玄が寄進した諏訪本宮の新社殿は、それまでの極彩色のものに替えて白木造りとした。ほどなく信長によって焼かれ失われる運命にあるのだが、清廉清浄な気高い造型はあまりにも洗練されており、この山間の地には似つかわしくなかったかもしれない。

「伊勢の宮を彷彿させる」

はからずも奉幣の勅使がそう呟いたのは、桃丸の自負をおおいに満足させた。

元来、武田家が甲府を拠点に選んだのは、陰陽道の相地の術（まじ）によっている。甲府は、四神相応の地として、甲斐一国においては最強の龍穴を抱えている。平安京の縮小版として、一地方の支配拠点にはまことに相応しい。地勢の鑑立てをおこなったのは熱田の陰陽師のようだが、屋形の定めにも狂いはない。甲斐一国の拠点としては万全のものである。

ただし、天下を望むためには、さらに諏訪の神威を取り込まなければならぬ。甲斐一国の地龍では到底およばないのだ。そこで信玄は、諏訪から上洛をめざすこととした。

しかし信玄にはその前に成し遂げねばならぬことがあった。目前の最大の強敵、越後上杉と雌雄を決しなければならぬ。上杉に打ち勝つことなしに、上洛はありえない。折りあらば信濃を侵そうとする越後勢に強固な楔を打ち込んで、後顧の憂いをなくさなければ、

長途の戦旅に出ることは不可能だ。

川中島

桃丸は茶臼山の中腹にいた。左手から遠く右の彼方の山麓に向けて犀川の河面が光の帯となつて横たわる。川を挟んでの信玄対謙信の二度目の決戦は小競り合いがあつたかと思えばしばし動かず、陣形の異動があつたかと思えばまたそのまま待機するといった様子で、ゆるい変化は決戦とも思えない。望見する桃丸は焦れてた。

「だめじゃな、これは。埒があかぬ」

諏訪本宮での戦勝祈願から、そのまま一度は川中島を目指したが、越後勢の動きが緩慢なために結局出直しとなつた。その間に田植えの時季となり兵の多くは帰農した。また旭山城の攻防を挟んで時間を費やし、結局のところ犀川を挟んでの決戦は夏になつてしまつたのだ。

ここでの対峙は一昨年に続き二度目と聞くが、はたしてこの戦が天下を左右するのだろうか。信濃や越後は、都からあまりにも遠い。戦国と言われる混乱の様を、すでに幼き頃より都で見てきた桃丸には、この合戦の勝敗が、都の政事の帰趨を決するとは思えなかつた。鶴翼の陣形も魚鱗の陣形も、よく統率されていて確かに美しい。磨き上げられた甲冑や刀槍が夏の陽射しにきらきらと輝き、色分けされた互いの旗差物が紋様のように大地を染め上げている。ぶつかり合つては、また別の陣形を採り、流れるように騎馬と徒兵が接触を繰り返す。こうして遠望していると、互いに寄せては返す鬨の声も、まるで細波のざわめきのようである。

信玄にも謙信にも、戦術はあるが、戦略がなかつた。

「漢土の三国時代さながらで、古い古い。まるで戯れているかのようだ」

「阿智殿の策はお採り上げにならぬので」

桃丸の傍らの草叢から声のみがする。蔭供だ。

「献策はしたがの、採るも採らぬも、お屋形様のお心次第。采配を振るうのは吾ではない。まして勝つも負けるも、お屋形様のものだ」

二度目の川中島決戦は一進一退を延々と繰り返し、対峙はこの後実に二百日にも及んだ。その間桃丸は時を持て余し、甲信の山野を駆け巡るのもいささか倦んでいた。

建御名方神の神威は強大であるが、あくまでも国津神であつて、天津神の後塵を拝する。国津神は、大八嶋国の被征服者である。もともとは支配者であつたのだが、天津神・邇邇藝命の降臨に際して国を譲り、自ら統治権を返上し服したものである。

以来、永遠にも等しい年月が経つた。国津神がこの国に君臨するためには、ふたたび天津神に拮抗する力を得なければならぬ。信玄が桃丸を招いたのは、神頼みの梃子入れであつたのだ。

しかし桃丸の技能も智恵も神事にとどまるものではなかつた。桃丸が究めている陰陽の道の奥義は、兵法の根幹を成すものでもあつたのだ。

その由来を避け、諸葛孔明においてすでに基本の原理は完成されており、その主たる用途は軍事戦略である。信玄には初めて対面した際にあらためて詳細を言上したが、とくに反応はなかったと記憶している。

もつとも、もし仮に信玄が桃丸の戦略を採用しようとしても、並み居る老臣重臣たちが素直に同意するとは到底考えられない。武田の家に代々仕える誇り高き者たちは、われこそがお屋形様を諫めるのだと常日頃から気負っているのだ。武田への忠義立ては、そういうものど心得るのがご当地流というものようだ。

これは、鉄の結束を形作り、戦国最強と謳われる軍団を現出せしめたが、同時にすべてを固定してしまった。確かに評判通り武田は強い。しかしその戦いぶりも、陣容も、おおむね誰もが知るところである。知っていても勝てないほどに強いのだが、その体制にひとたび綻びを生じた時、はたしてどうなるか。桃丸は招聘されて間もなくそのことに気付いたが、重臣たちは一人としてそのことに思いが至っていないことに暗然とした。

結果的に桃丸が信玄に仕えたのはごく短い期間であった。諸葛孔明の血脈を受け継ぐというこの若者を、都から招きはしたものの、残念ながら信玄には十分な活用の仕方がわからなかったのだ。甲信の地においては日々の合戦に明け暮れる段階でもあって、まだ桃丸の活躍する機が熟していなかったと言えるのかもしれない。

武田の本陣に桃丸が平伏している。

「都へ戻るか」

信玄があらぬかたを見ながら呟いた。跳ね上げた鎧窓の外には冠雪の八ヶ岳が見えている。信玄は大地をつかんでいるかのようなこの山容を特に好んだ。

「吾の役目は、もはやここにはないと思えまするゆえ」

面を上げた桃丸の眼にはもはや信玄の姿は映っていないかのようにであった。背筋を伸ばして面前に端座するものの、彼の視線は信玄を通り過ぎて遙か彼方の虚空を見つめている。そこに何を見ているのか、余人には想像の埒外である。

しかし桃丸は、去るに当たって「置き土産」を残すこととした。

運気を左右するに先祖の墓陵を重要視する見立ての仕方を「陰宅風水」と称する。これは、生きている者の住まいを「陽宅」とし、対するに死者の住まいする場所を「陰宅」とする陰陽説に基づいている。

陰宅風水の基本思想は、「先祖の墓陵」が「子孫の家の繁栄」を守護することにある。すなわち墓陵の位置や構造などが吉であれば、その子孫は代々栄える。もしもこれとは逆に墓陵が凶であるならば、子孫はもはや衰退の一途を辿るばかりとなる。

桃丸の置き土産は、この陰宅風水の指導である。それは信玄の求めるものでもあった。

「我が身にもしものことあらば、なんとすれば良いのかのう。ひとつ智慧を置いて行つてくれぬか」

常ならぬ低い声であった。信玄は勝頼が合戦の陣頭指揮には秀でているが、武田の当主としてはいささか心許ないのを承知していた。

桃丸は、初めて信玄の心の底を覗いた思いがした。君臨することの孤独さが、信玄の背後から押し包もうとしているかのようにだ。

「諏訪湖の湖底に菱形の陵墓を造り、そこにお屋形様のご遺骸を納めるのが最良の方策と

存じまする」

「なんと、水底みなぞこにわしの墓とな」

「左様にござります。諏訪の湖こそは、甲信の要。ここにお鎮まりになられるとは、すなわち諏訪神と一体と化し、永遠とわに守護神となることに他ならず」

この日から十七年の後に、桃丸が残していった指示書にきわめて忠実に「信玄の水
中墓」は築造されることになる。

昭和六十一年（一九八六）、国土地理院のソナーによる湖底地形調査によって、一辺が二十五メートルの菱形の物体を湖底において発見。これが伝説の「信玄の水中墓」ではないかといわれるが、いまだ確認はされていない。

なお菱形は武田菱とも言われるように、武田家の家紋ともなっている。表紋は三階菱、女紋は花菱。その菱形を三十面つなぎ合わせて一個の立体を造れば、菱形りょうけい三十面体さんじゅうめんだい（rhombic triacontahedron）、その面の対角線の比は黄金比になる。すなわち五芒星と同じく、陰陽道・地理風水の真理を象徴的に体現する図形である。

桃丸は、湖の底に巨大な菱形墳を造り、その四辺を諏訪社四社が守護するという形を描いた。黄金比による守護の陣形である。しかしこの方術がはたして「何を」守るためのものなのか、真相を知る者は桃丸のみであるだろう。

熱田社

深夜。満月。熱田神社本殿に参集しているのは、尾張と美濃の海部あまべ一族である。一族を統率する凡海あまのうみをはじめ、尾張、酒井、服部はつぐり、岡部などこの地域の主立った氏の長が顔をそろえていた。年に一度、六月五日の熱田神大祭の直前、満月の夜と決めて、一族の消息を交換するために集うのが古来の習わしとなっている。海人あま族は大潮とともに生きてきたが、とくに満月の前後の大潮は「母なる海」「神の依り坐す海」として尊崇している。夜祭りや一族の集いを催すにはこの時を措いて他にない。

祭祀の後の直会は、拜殿脇の神楽殿でおこなうのがここ数年来の恒例になっている。海の幸を中心に用意された酒肴は、久々に顔を合わせた血族たちを和ませるのに一役買っているようだ。元服前の禰宜あたらたちが酌いで廻っているのは暖酒あたなほけである。

海部の者は、酌み交わす酒は夏でも必ず温める。青銅か鉄の爵しゃくという器で直に火にかけて加熱する。それが古くからの慣わしで、しかも温めるのは酒ばかりでなく、飲食物はすべて加熱するのが決まりである。日の本の国では水も魚貝類も自然のままであることをより珍重するが、海部はその習慣しんぐわんについて馴染めぬままおおよそ千年もの歳月が経ってしまった。かつて飲食物に加熱する理由のあった風土を遙か遠くに去り来たって、今やとくに加熱の要のない新たな風土に根付いて久しいにもかかわらず、依然として元の習慣が抜けていないのだ。

しかし身内以外ではもはやその慣習は用いない。熱田でも多くの神社と同様に御神酒は鍛鉄の長柄両口銚子で常温の澄み酒を注ぐこととしている。これは唐風と和風の折衷である。

座を取り仕切っているのは熱田の宮司の尾張であるが、すでにだいぶ酔いが廻っている。

「常光よ、ぬしゃ願人坊主となって久しいが、息の次郎三郎はどうしている」

「売った」

「誰ぞに」

「それ、そこにある三河の服部じゃ」

服部保長は元は伊賀の住人であったが、先代の松平広忠に乞われて家臣となった。取り持ったのは尾張宮司である。他の重臣がすべて三河の国人である中、ただ一人の他国者である。そのためか、国人としての柵が障害となるような事案の処理は、とかく保長に廻ってきた。

「使い道は」

尾張が尋ねる。

「今川にな、囚われとなる。身代わりじゃ。とは言っても残るも地獄、行くも地獄よ。生き残ったほうが三河の松平竹千代になればよい」

尾張国造家の支援を受けて、三河松平は先々代から岡崎を領している。しかし小国のため、今川と織田に挟まれて常にいずれかの属国として扱われている。長子の竹千代は初め織田の人質に取られていたが、謀略によって今川に移り、人質のまま元服を迎えようとしていた。

岡崎は、竹千代の父である松平広忠が他界して以来、当主の不在が続いている。在郷の家臣たちは竹千代の奪還をかねてより熱望していた。

しかし表立っておこなえば今川と事を構えるようになるのは明らかで、それはむしろ松平の滅亡を意味するだろう。なにしろこれまで人質に取られてもひたすら忍従を貫いてきたのは領国を守るためである。あくまでも隠密裏におこない、しかも今川から何も咎め立てのない方法を探らねばならない。

「母者が同じだけあって、よう似ておるのでな。元服を機に入れ替える策を考えた」

母の於大の方は竹千代を生んでもまもなく広忠と離縁した。於大の兄の水野信元が織田信秀についたため、今川への配慮からの離縁とされている。

於大はその後、非婚のまま男児を生む。それが次郎三郎である。つまり次郎三郎は竹千代とは母が同じの異父兄弟であるが、松平の血は引いていないのだ。

於大は次郎三郎を養子に出し、独り身となって久松俊勝と再婚した。

次郎三郎を養子に貰い受けたのが願人坊主の酒井常光であり、これが本当の父親だといふ噂もあるが、当人たちは黙して語らない。

「まずは僕の養子となす」

服部保長は亡き松平広忠の側近である。養子となる者は服部次郎三郎と名乗ることになる。

「しかしして、今川の竹千代様と入れ替わる」

「おう、なるほど。竹千代が服部次郎三郎となり、本当の次郎三郎が今川の人質となるわけか」

「そうじゃ。それでもし今川が勝ち残れば、義元の後見によって人質の次郎三郎が三河の当主となるであろう。その時には、僕が元に潜み居る服部次郎三郎は、僕が手で殺す」

「竹千代を手にかけるか」

「しかしもし今川が倒れば、人質も無事では済むまい」
「売った以上、どうなるうとも勝手じゃ」

「その時は儂が手元の服部次郎三郎竹千代を松平の当主と押し立てて、織田との同盟に三河の命運を賭ける。」 これ以外に生き残る途はない」

もうじき熱田も夏になる。海を故郷とする海部たちには活動の季節の到来だ。

海部の一族は応神天皇の御代に渡来した漢人に発する。

海部はその名の通り、古より水運と水軍を統括して発展してきた一族である。東は常陸、安房から、西は筑紫、日向に至るまで、千年余にわたって海の上のことはすべて海部のものであった。渡来の一族であるところから、この国の「陸のこと」には関与せず、ひたすら「海のこと」に徹してきたのだが、そのことであって集約されて特別な力を持つことになったのは皮肉であった。

どこの国でも統治者の条件は三つとされる。すなわち、軍事と経済と宗教である。奇しくも海部はそれら三つを得ることとなってしまった。

土地に居着く一族の者は国造となり、産土社の宮司や祝となる。たとえば丹後の籠神社には海部氏が、摂津の住吉社には津守氏が宮司となっているが、いずれも尾張氏と同じく国造家である。そして一族のつなぎの役となる者は定住せずに、願人坊主や陰陽師となって諸国を移動する。

呑み疲れ語り疲れた一座を拭い洗うかのように、なま暖かい一陣の潮風が開け放した神楽殿を吹き抜けて行く。この辺りでは大潮の夜は潮の香りがひととき強い。

「信玄は動かかのう」

「動く。今川も、動く。武田が今川か、先に上洛したほうが天下を押さえることになる」

しかしそれからわずか数年後に今川が、続いてほどなく武田が両者ともに滅亡の危機に瀕するようになるうとは、いったい誰が予想しただろう。今川義元亡き後の氏真も、また武田信玄亡き後の勝頼も、ともにその存在の危うさが亡国の要因となった。古来言い習わされているままに「英傑は一代限り」であったのだ。しかも彼らを征して勝ち残ったのは、今川を牽制していた北条でもなければ、武田に拮抗していた上杉でもなかったのだ。

不二山

切り立った谷から谷へ早駆けする桃丸の姿は、山の神の使いとされる白い雄鹿を彷彿させた。

先導のために供駆けするのは、不二山麓に宿坊を持つ修験者たちだ。彼らは桃丸が駿河に入ってから、交替で蔭供をつとめている。普段は姿を人前に晒さず、しかしどこへ行くにも離れずに付き従うのが役目であるが、今は桃丸の先になり後になりと同行の態である。さすがにこの修験の聖地には人目がまったくないので隠れる必要がない。このような場所にもしも何者かの目があるとすると、それは彼らの同族と違って間違いない。とくにこれより先は「浅間の禁足地」となるため、よそびとの入り込む可能性はまずないだろう。

桃丸たちは、北口本宮の境内奥、その昔日本武尊が遙拝したと伝える吉田口から一気に山頂を目指した。修験の者でも通常は迂回路をこつこつと登るのだが、迷わず直登路へ走り込み、そのまま駆け上がる。なまじの体力では到底かなわぬ険路である。

不二山頂に立ち、噴煙の立ち上る火口を見下ろす桃丸が、ゆつくりと目を火口の外に巡らす。不二はこの国の大地の中心であり、地脈を走る旺気の源である。地域にはそれぞれ源となっている神の山すなわち神奈備があるが、これを祖山という。そしてその祖山すべの源となる神奈備を太祖山たいそざんという。漢土では泰山が太祖山であるが、この国では不二山が太祖山である。

「信玄は太祖山の気を受けそこねたな。 諏訪がだめなら、駿河となろう」

桃丸の眼下に、不二から走る幾筋もの地龍が見渡せる。地龍を流れる龍脈は、旺気に乗せて運ぶ大地の経絡だ。この逞しい龍脈は、久能山から駿河へ向かっている。

不二からは四方に巨大な龍脈が走っているが、なかでもとくに注目すべきは北側の不二五湖に向けて発する地龍である。

その地龍が発現して五湖にはそれぞれ龍神が棲むとされる。

本栖湖には古根龍神

精進湖には出生龍神

西湖には青木龍神

河口湖には水口龍神

山中湖には作楽龍神

それは甲府、諏訪、松本、長野の方面に活気をもたらす最も古い地龍である。新しい地龍が活性化すると、古い地龍は涸れて行くが、六十年、あるいは百二十年を経て蘇る。

「この地龍は、涸れの時期に入っているのかもしれない」

その次に注目すべきは南西に向けて富士宮へ一気に降り注ぐ地龍である。そこから身延山を経て駿河、遠江、三河、美濃の方面に活気をもたらす地龍である。桃丸はこの龍脈を確認するために不二登拝したのだ。地勢は、水と風と植物とが教えてくれる。雲が切れると山裾をぐるりと被っている樹林の海が一望できるが、それはそこかしこで波立ち渦を巻き、くつきりと流紋を浮かび上がらせる。伏流水と風の力が造り上げる大地のうねりだ。

「やはりな。気配は、変わった」

「変わった、のでござりまするか」

跪いている蔭供の一人が桃丸を見上げた。

「変わった」

「われらにはわかりませぬ。なにとぞ御教導ください」

「吾は不二に来るのは初めてだが、陰陽寮の倉に『不二の龍紋』という見立てがある。天空より見下ろして不二を核とした五芒星にて地龍を読み解いたものだ。それを、吾が目にて確認したかったのだ」

桃丸は龍紋の見立てと変化についての要点を修験の者たちに説いて聴かせた。龍紋のことは陰陽道の秘伝であったが、桃丸にはそういったこだわりはない。むしろ駿河や甲斐の修験は、これを知るべきであると桃丸は思う。ただ、それを聴いたからといって、それで何かできるかといえ、単に事実として知るのみである。そこから何事かを読み取り、あ

るいは変化を予測するには、さらに加えて多くの学習と修練が必要で、あるいは天稟の才能も要るやもしれない。「秘伝」だけでは、多くのことは望めないのだ。

ところで龍脈はもう一つ、桃丸たちの立つ位置からは裏側になるが、東の脈がある。丹沢山塊を経て鎌倉、横浜、江戸方面へ発する地龍は最も巨大でかつ強力な旺気を秘めている。

ただし暴れ龍であるために、封ずるための方策がなければこの龍脈の上にある地も人もあらゆるものが荒れ果てることになるだろう。それでもこの地龍は鎌倉に一度は旺気をもたらしたのだが、その後は不気味なくらい静かに眠っている。はたして今度はいつ暴発するのか。それを統べることのできる者がいつか生まれるのか。桃丸にはそこまでの読み取りはできなかったが、もしその時に立ち会うことができるのならば、桃丸はおのが命を捧げても良いと思っていた。

「帰りは不二川だな」

「あれに見える糸にござりまする」

地龍はその先端に吹き出し口である龍穴をいくつも持っており、その多くの口には古社が鎮座する。しかし山麓の浅間山宮、またその先の大宮に鎮座する浅間神社は地域の祖山を経ることなく直接太祖山の旺気を吹き上げる龍穴に建っている。

風向きが変わり、噴煙が一瞬のうちに桃丸たちを包み込む。しかし彼らの動きはそれよりさらに素早く、強風によって噴煙が途切れた時には遙か遠く一丁ほど跳んで斜面を下っていた。遮るものとながれ場の急斜面を、蔭供の修験者たちと追いつ追われつ遊ぶがごとく下ってゆくさまは、さながら雷鳥の親子連れのようにであった。

桃丸一党が山麓の浅間山宮に着いたのは、それでもすでに陽が落ちて月明かりによつやく互いの身体の輪郭がわかるくらいになっていた。桃丸はここで蔭供の一団と別れ、一人で身延へ向かう。夜目の利く身には三日月に星明かりがあれば夜の山道もとくに支障はない。

桶狭間

永禄三年（一五六〇）五月。

降りしきる雨の中、信長は馬上で絶え間なく奇声を発していた。誰に向けて何を下知しているのか周囲の誰にもわからなかったが、この状況ではそれでも一向にかまわなかった。家臣のほとんどの者が死と直面しながら闘っていて、なおかつこの雨である。敗走する今川方の阿鼻叫喚に煽られるように織田方の喊声が増幅してゆく。武器のぶつかり合う音が次第にまばらになってゆくが、それでも両音はそれに勝る騒音にかき消されてまったく聞こえない。血刀を突き上げて叫び続ける信長の奇声かたとえ意味のあるものであったとしても、誰一人聞き取ることはいかならう。

信長がようやく我に返ったのは、軍勢の多くが疲れ果てて、今川方が散り散りに壊走してしばらく後のことであった。

「勝ったか」

さすがに気丈な信長もようやく安堵する思いであった。左腕に敵の矢が突き刺さっていたのだが、この時初めて痛みを感じた。見渡す限り死屍累々である。血溜まりから立ち上る湯気で辺りは陽炎のように揺らめいている。

「義元の首を持って」

雨が止んで、ほとんど無風の状態で蒸し暑い。血の匂いが戦場に満ち満ちている。

信長の足元に据えられた首は少し傾いていた。

「見よ、公家真似の化粧が雨に濡れて流れおるわ」

信長は高声で笑ったつもりであったが、周囲には咳き込んでいるようにしか聞こえなかった。

桶狭間の主戦場から信長は真つ直ぐに熱田神社へ行き戦勝報告の御礼参りをおこない、それよりおもむろに清洲城へ全軍帰還した。すでに夕暮れであったが、城内には凱旋を迎える準備が整っており、先陣の帰還とともに戦後の処理があわただしくなる。怪我人の治療介護を最優先に、戦死者の浄めと慰霊、帰還兵への飲食の配膳、武器庫の担当士卒は武器甲冑の補修にも間髪を措かない。明日にも新たな戦があつて不思議のない状況においては、不断の備えこそは戦国武者の習いである。

翌日早朝、仮設の本陣に大将首がずらりと並べられる。義元の首は特別扱いで城内に安置されたが、その他の二千数百の首は城下の寺の境内に並べられた。首実検は主要な大将首のみおこない、雑兵首は南北並列に並べ、全軍が見守る中を信長は騎馬で三往復して検分した。

このたびは勝ち戦であるから「首褒賞」は数多い。しかしそれでも義元首は別格である。なにしろこの首一つのために信長はこたびの戦をおこなったのだ。

一番槍を打ち込んだ服部小平太と、首級を上げた毛利新助との二人に信長は真つ先に感状を与えている。それ以外の大將首への褒賞はこの朝の首実検とおもにおこない、雑兵首は隊毎に別れておこなう。

その日の午下がりより始まった祝宴は無礼講であった。雑兵たちの酔態をいつになくこやかに眺めていた信長が、戦勝に舞い上がる宿老たちに向かって一喝した。

「猪武者では、首は獲れても、天下は獲れぬわ。策が要るのじゃ、策が」

宿老の中には無然とする者もあつたが、誰も反論することはなかった。

桶狭間の勝利はこの後、信長にとつても、またこの国の歴史にとつても大きな意味を持つことになるが、この時はまだ信長の軍兵に特別な装備も能力もほとんどなかった。

尾張の国人兵は他国の兵に較べて決して強くはなかった。桶狭間では今川の油断に対して信長の戦術が最大の効果を挙げたが、この戦いが織田家の命運を賭けた一戦であつたことは間違いない。文字通り背水の陣で、もしもこの一戦に敗北すれば織田家に明日はない。信長はそういつた意識を重臣たちばかりでなく軍兵一人一人にまで徹底することによって持てる能力を吐き出させる方策を採つたのだ。しかし、ただそれだけのことであつた。

信長は急死した父に代わつて織田家の当主となつて以来、尾張兵を強くするために様々な工夫を用いてきた。戦に関しては一日の長のある漢土の智恵や南蛮の技工をも積極的に求め取り入れた。豊かな財力によって「傭兵」を積極的に押し進めるのもこの頃からである。父親の代から仕えている老臣たちの抵抗もまだ強く、実際に実行されたものはまだまだわずかなものであつたが、桶狭間の勝利を境にすべてが信長の意向に沿つておこなわれ

るようになった。
これ以後急速に変貌する織田軍は、見た目までもが他の軍とは明らかに異なる様相となった。

永禄二年（一五五九）に十三代将軍足利義輝が京へ戻った祝いのために、越後の長尾景虎が入京しているが、この時見聞した織田の軍勢について「異形の者多し」と記録している。家臣たちが「信長好み」に変貌した証言である。

おそらくはそのうちの多くが国人農兵ではなく、足軽という呼び名の傭兵であったろう。農閑期のみしか兵力とならない国人兵を減らし、戦闘を専門職とする足軽を増やす方法はこの時代に普及して行くが、信長はいち早く採用した。

これによって織田においては一年を通じて常に臨戦態勢を取ることが可能となり、しかも同時に百姓漁民から働き手を奪うこともなくなった。専従兵たちは戦士に特化したことで、日常の姿も変貌した。刀槍を常に携帯し、甲冑は身に着けぬまでも即座に戦闘姿勢が執れるよう手つ甲や脚絆などを常用するようになった。武士の姿が定まるのはこれに拠っている。

「甲冑はなくとも、戦に臨んでいる姿勢を常に保て。飯を喰らっている時も、眠りにについている時も、我らは戦をしているのだ」

織田軍が急速に強さを増して行ったのは、この方策をどこよりも早くに採用し、ひたすら突き詰めて行ったからである。

見た目の変化は誰の目にも分かりやすいことから、これも信長一流の策の一つと思われるが、同時に戦闘機関としての軍勢の本質をも変貌させていたことは、信長の統率者としての才能の躍如たるものがある。後々、多くの場面で敵となる者は驚かされることになるのだが、合理性と効率性を第一に考えるその姿勢には、尾張のうつけと言われた面影はもはやまったくない。

信長は様々なことに創意と工夫があった。

槍一つにしても、いずれの国でも常用の三間槍に誰も疑問を抱かぬ時に、一人信長は異様なまでに長くすることを発想した。三間半(約六・四メートル)の長槍である。信長は火縄銃や鉄甲艦などの新しい武器軍備に積極的に取り組むばかりでなく、こうした基本的な改良にも独特の発想があった。そしてこれこそは白兵戦を前提とした戦場における際立った合理性のたまものである。さながら明治維新の奇兵隊の発想で、個人の技量の優劣に頼らず、装置あるいは機関としての軍隊を構想しているからだ。彼は戦を変えたのだ。

織田軍は、桶狭間の当時はまだ国人の農兵と外国人の傭兵の混成部隊であったのだが、それがたまたま効を奏した。農兵は国人であって信長のために命働きをする。傭兵はさらなる報酬と己の出世のために働く。

宿老たちの反対を押し切って傭兵を起用することには信長といえどもかなりの胆力を必要としたが、これこそが今後の戦を左右する決め手であるとの確信から、信長は押し進めていたのだ。

戦国の戦い方はこの前後から急速に変わり始めていて、季節などに左右される農兵主体から、常に臨戦態勢でいられる専従兵主体へと転換する。それでもなお、国人の農兵を主力とすることにこだわり続けた武田などの有力領主たちは、軍隊の近代化に遅れを取ることなり、結果的にそれが致命傷となる。

そして信長は、これを積極的に押し進めたことよってついには覇者となるのだ。「理に適うものは強い。理に適わぬものは滅びるのみ。だから理不尽を予は憎むのだ。それだけのことだ」

うつけと呼ばれた若き頃からの信長の常套句であった。

彼はこのような考え方を尾張の海部の一族から学んだ。彼らの中で幼少より養育を受けたことで、彼ら独特の考え方が自然に身に付いたものである。

信長は用兵術においても、たとえば父信秀の剛腕振りに比べると、時には狡猾とも思えるほどの策を用いて老臣たちの鬻ぎを買ったことがあった。

しかしその考え方も、さらに言えばそうして老臣宿老たちの鬻ぎなどまったく気に掛けないことなども、この時代の他の武將たちと大きく異なる信長ならではの資質であった。

その異質さゆえにかねてより「うつけ」などの誹謗を受けもし、ひいき筋からは逆に「謀つてうつけのふりをしている」との穿った言辞もありはしたが、もちろんうつけなどではなく、またうつけのふりをしているわけでもなかったのだ。信長からすれば、己れの合理的な考え方に追従できない他のすべてがまさしくうつけであって、信長のように思考した行動したりしないことのほうが憎むべき愚かなことであつた。

信長は早くからこうした彼我の違いに気付いていたが、どうやらそれが深いところに根ざしていると考えに至つたのはかなり成長してからのことである。自分と同様の考え方をする者とならない者がいて、この両者は文字通りお互いに「異国人」「異民族」なのだというものだ。

「どうやらあやつらと我とは違う生きもののようじゃ」

「違う生きもの」とは、いかにも信長らしい表現であるかのようにだが、それがものの喩えなどではなく言葉のままであることを認めなければならぬだろう。それは幼少期に信長が渡来系の氏族に養育されたことも関係があるが、実は出自にも由来する。

信秀の正室であつた土田御前は、信長、信行、秀孝、信包の生母とされているが、信長のみはそうではない。信秀が海部の女に生ませた子である。ために、土田御前は次男で実子の信行に織田の家督を継がせようと様々な策を弄することになる。

今川は自らの驕りと油断もあつて織田信長の奇襲に敗れたが、これによつて今川の人質となつていた服部次郎三郎 義元の後見で元服し、松平元康となつていた。ははからずも岡崎城への帰還が許された。服部保長をはじめとする数人の重臣たちはこの成り行きを僥倖として「二人の元康」を受け入れ、しかしこの事実を彼ら数名のみ知るものとして嚴重に秘匿した。

内裏

天皇の御前に、山科言継が密奏にまかり越している。

笏を両掌で捧げたまま平伏し、言継が言上する。

「大和の漢人を用いるよう願ひ上げます」

御簾の内の御姿が身じろぎする。

「そうよな。あやつらは、悪き者どもじゃ。このような時こそ、使おうぞ。時は今じゃ」「毒をもつて、毒を制するとはまさにこれがことにおじやります。さすれば、内裏の費えも復するかと存じ上げます」「早うそう願いたいものや」

天文十年（一五四一）に織田信秀が四千貫を外宮造営費として献上、天文十二年には皇居修理費として四千貫を献上。これでひととき凌いだ、が、うち続く戦乱の影響で悪化した内裏の苦しさは依然としてほとんど変わらない。

「ひと選びにござりまするが」

「さいなあ、たれがええかないなあ。なにせ相手は鬼やからなあ。たれに鬼退治さしたるか。田村麻呂でも生きていたらええんやが。なあ言継、たれがええかないなあ。坂上に適当な者はおらぬかや」

「これに控えておじやりまする」

言継の合図に下座の屏風裏より掌侍にいざなわれて進み出た者が平伏する。

「ほ、なんや、桃丸やないか。御簾を上げよ」

すかさず女孺が御簾を巻き上げる。

「こなたがゆくのか。それええ。桃丸やったら、あの鬼を相手にしても不足ないやろ。」

そうや、鬼退治の桃丸や」

桃丸も阿智使主の直系で、坂上とは同族の漢人である。かつて坂上田村麻呂は東国征討に大功を挙げて征夷大將軍の称号を天皇より賜った。以後、征夷大將軍は武家の頭領を示す称号となり、源氏も足利もこの称号によって君臨するが、その初代となった者こそは東漢氏の長であった坂上田村麻呂である。しかし桃丸は武官ではなく文官として陰陽寮に仕えている。

「桃丸も田村麻呂も東漢の本家筋で一族におじやりまする」

「そうじゃそうじゃ、さようであった。しかしこたびは、こなたに預ける軍勢がないのやが」

かつては天皇の命によって数万の軍勢が動員されたが、いまやそのような勢威は見る影もない。言継に促されて桃丸が言上する。

「どうぞお心遣いなきように。吾の手の者にて仕立てます。まずは忍び御用なれば」

桃丸は早くから陰陽寮に出仕していた。学生を最短で了えて最年少で天文博士となり、やがて陰陽師も兼務した。

甲州武田に招かれたのは陰陽師となつて最初の公務鑑定において、とりわけ相地の術に優れているとの評判が立ったからである。

関白近衛前久卿の奏聞によつて、陰陽寮による施術の勅許があり、桃丸に白羽の矢が立った。この時桃丸は、不運の打ち続く右大臣家のために邸宅の化殺術をおこない、凶運を一掃したのだ。右大臣は「桃丸に命をもらつた」とまで言つて感謝の念を表明したほどであった。

これを機に同種の案件が立て続けに三件あつて、すべてにおいて期待以上の働きがあり、陰陽師阿智桃丸の名は、堂上衆の間では知らぬ者のないほどに高まった。

とは言つても、実際に桃丸と面識のある者はごく少数に限られている。陰陽寮の者は陰

陽頭を除いて公式の場合へはほとんど出ないのが慣わしで、したがって桃丸の名がどれほど広まっても、この若き俊才が「幻の陰陽師」であることに一向に変わりはなかったのだ。まして桃丸の顔を見知る者はきわめて少数である。

陰陽師は大宝令で機関設置を定められて以来七百年このかた天皇直属であって、その活用には勅許が求められる。つまり武田も主上へ働き掛けがあつて、その結果桃丸の招致を実現したものである。介在したのはこれも近衛前久で、この時一部の公卿と天皇はまぎれもなく武田信玄に期待していた。この戦乱の世を収束させる実力を持ち、そしてその後の安定した政権を樹立して維持できる大名として、事情通であればまず筆頭に挙げていたのだ。

しかし武田は見限られた。

「こたびは、織田を動かしてたも」

桶狭間でその名を上げた織田信長は、いまやかつての信玄を上回るやもしれない。

「なにごとにも主上の命のままにござりまする」

武田を辞して陰陽寮に戻つてから、すでに十年が経とうとしている。

その間にも、勅命によつてしばしば各地へ下つた。そのために陰陽寮で指導する機会は稀であつたにもかかわらず、下野国足利学校では三年間も天文道と暦道を教えることになつたのは皮肉であつた。本来は上杉の墓陵の見立てと築造指導が役目であつたのだが、関東管領の奏請によつてそのままとどめ置かれることになつたのだ。

この頃足利学校は武士や神職、僧侶などが集まる最高度の学府となつていて、その学生総数は三千人に上つた。しかも皆が皆、志をもつて修学にやつてきているため校内に熱気が満ち満ちていた。較べるのは不遜であるとはいうものの、内裏の陰陽寮の寂れた状態とは天と地ほどの違いがあつた。

「この任のあとは、もつもつ近づいておつてほしいものやなあ。内膳別当は、どうやる。

朕の食養をまかせたい。あんまり言ひとうはないんやが、近頃どうも思つうよになかなかなあ」

「お上のご意向のままに」

言継は平伏した。内膳司とは天皇の食事を司る職で、別当はその長官である。食を一任されるといふことは、すなわち命を預けられるということである。ひとところ陰陽師の最高職となつた時期もあり、陰陽五行に基づく食養の知識が不可欠とされるが、なによりも天皇の親任が必須である。

「ただ、別当は、納言の兼任となります」

「そやつたな。それなら官位を上げとこか」

「さようあらしやりますなら、近衛中将が大弁がよろしいかと」

左右近衛中将は禁門の警衛、天皇の侍衛の職で、行幸の際は大将少将などと共に弓箭を身に付けて供奉する。また左右大弁は詔勅をはじめとするあらゆる文書の作成を担務し監査する職である。これに検非違使別当を加えて、三職いずれかの地位になれば大中納言には昇進できない決まりであつた。

「桃丸、好きなほつへ任ずるよつて、ゆるゆる考えとき」

密奏の場ということもあつて主上の物言いはとくに親しみを込めたものになっている。

近侍の女官以外に余人は立ち会わず、右筆の記録もおこなわない。

本来なれば密奏に余人を伴うのは禁忌である。言継は権大納言であり元の内蔵頭であるが、そうであるか否かにかかわらず「密奏」であるのだから当然のこととして天皇はみずからの直接の指示によって人払いをおこなった。ところが席を外したのは御前に参進列席していた公卿のみである。

そもそも密奏とは上御一人への密かなる奏上であるのだが、そういった宮中の決まりごとと近頃ではすっかり弛んでしまい、とくに女官たちの綱紀は応仁の乱より後はとりわけ杜撰になっており、費えの逼迫と重なるように崩れている。

言継はしばしば密奏昇殿していることもあってそんな状態にも慣れてしまっていたが、それでも内容によっては女官たちには聞かせたくないものもある。しかしこのような状況にあつては如何ともしがたく、漏れるのを覚悟で奏上するか、さもなければ奏上そのものを断念するより他にない。そのような環境が結果的には主上を政情の機微に疎い立場に置くこととなっているのかもしれない。しかし罪は女官にあるのではなく、内裏を逼迫の極みに追いやったこの時代そのものにあるだろう。

結果的にこの度の奏上の内容も、どこからか漏れることになるかもしれない。言葉を選び、なるべく抽象的に言上するよう、言継は事前に桃丸に囁いていた。

「こたびは正面切つての征討にはあらし。内に入り、力を取り込み、時の流れを造りまする」

「真の政まことしんせいの道筋を付けまする」
 言うまでもないことだが、祭祀と政務の双方が揃って初めて一つの「政」である。どちらが疎かであっても、「政」たりえない。

しかし実際には、だいぶ以前から政務は内裏を離れ、足利の宰領となっている。また足利將軍家の威光が衰えて後は、いくたりかの有力な戦国大名が覇権を争っているものの、抜きん出るだけの者は現れず、ただ内裏の威光は衰えるばかりであった。

紫宸殿において政務を執り、太政官以下の文官全局も十全に機能していた頃からもうずいぶん経つようだが、清涼殿にその場を移してからもとくに本質が変わったわけではない。いまや清涼殿の玉座の役割は、祭祀と儀礼に限られており、いわば象徴であるにすぎない。勅命にはそれなりの効力がまだまだあるとはいうものの、良くも悪しくもそれを機能させたい者がいるから成り立つので、いわば力の均衡が生み出す危うい立場でもある。ここここに至っては、もはや天皇親政に復するのはかなわぬ願いであるのだろうか。

「姓をお与えくださいませ。こたびの任は本性を忍びまするゆえ、新しく名乗るのがよろしきかと存じおりまする」

言継は笏を捧げて平伏した。下がり座で桃丸もそれに倣つ。

「そうよな、まさか源平藤橘げんへいとうきよというわけにもゆかぬよのう。こなたらの遠祖とほつひややった

阿智使主あちのおみにちなんでも明智はどうじゃ。明智桃丸じゃ」

「名は光秀といたしたく。主上のご威光がいや増しますよう念を籠めて、ひかり、すぐれる、と」

「ふむ。ほな、明智光秀やな。ええやる。さよう名乗り」

「ありがたく候」

飛鳥

阿智桃丸あらため明智光秀は、内裏より退出すると、すでに待機していた二人の従者とともにそのままを出た。向かうのは大和飛鳥である。

五月の大和路は木々の緑が目に見鮮やかで、濃密な草いきれが往く者を押し包む。石上神社、松原神社、三輪神社に参拝し、葛城道に入る。飛鳥坐神社あすかにいすしんじやの鳥居の前では一族の迎えを受けた。

「すべての同族に下知せよ」

光秀は、坂上さかのうえ家の邸宅に集めた氏の長たちに命じた。

「天皇より直々にご下命あった。これより尾張の織田を我らは支える」

「ほう、織田に天下を獲らせまするか」

声を挙げたのは長老の坂上忍熊おしくまである。長となる者はいくつかの氏祖の名を受け継ぐことになっている。忍熊は駒子から三世孫の一人で、平城宮造営の大匠でもあった。その誇り高き名を受け継いでいるのだ。

「天皇は、さよう思し召しのようだ」

「是非もないことやが、我らにご下命となった真意を知りたいものよ」

「真意は、知らぬ。また知る必要もあるまい」

座を沈黙が支配した。

「軍勢を仕立てまするか」忍熊が勢い込んで高声になる。

「いずれな。いまは少人数でよい」

「先乗りの連絡を受けて、特に武術に優れた者を三十選んでございます」

「多いな。その半分でよい。多いと警戒される。まずは受け入れてもらわねば始まらぬでな」

「信長に天下を取らせるには相應の武力支援も要りましょう」

「むろんだ。漢人は総力を挙げて支援する。吉備、丹波、河内、伊賀、尾張、すべての長につなぎを取れ。しかし吾は、当面は織田の兵を用い、織田の軍略にひたすら貢献する。

それがこたびの企みの踏むべき手順だ。信を得て、重用され、そうして軍勢を預けられるように仕向けねばならぬ。手勢を加えるのはその後だ」

「重臣はすべて尾張の地者と聞き及んでおりますが」

「吾もそう聞いておる」

「なれば、ただ一人の余所者ということに、しかも一番遅れて加わるということになりましょうや」

「それゆえ企みが要るのではないか。新参の余所者が、古参の重臣どもを押しつけて一番出世をせねばならぬのだ」

「特別な策を考えねばなりませんな」

「すでに策はある」

光秀は東漢の長たちを改めて見回した。策は何かわかっていかと問いかけているつもりであった。

「わからぬか」

「漢人の術を開示なさるか」

「咳くように答えたのは坂上の長であった。」

「さすがに忍熊の長はお見通しよの。特別な手みやげを持ってな。さすればじきに重用されて、しかもその後、期待以上の働きをしてみせようぞ。なにしろ天下を取らせねばならぬのでな」

この国の軍勢は、本来、一つの御旗御印の元に集まる皇軍でなければならぬ。すべてが帝の手勢だからこそその皇軍だ。

しかし群雄割拠の時代にあつては、皇軍同士が闘うようなもので、もし名目上も皇軍たるには勅宣が要る。そしてもしもいずれかの手勢が勅宣をもって皇軍となるならば、それ以外はすべて賊軍となつてしまふ。すべての民はおおみだからであるにもかかわらず、皇軍と賊軍とに別れ、血で血を洗う闘いをしなければならぬのだ。これが帝の本意であるはずもない。にもかかわらず、長い間その不本意の状態が続いている。

「歴史が動かぬなら、我らが自ら手がけねばなるまい」

東漢の自負である。漢人は、軍事軍略に長けており、これまでもこの国の変わり目に寄与してきた。阿智は、漢人の長の血筋に許された古き名である。

漢人を使いこなした者が覇者となるという先例は蘇我氏が示した。

その後、天武帝は詔を發して、大和の漢人を天皇の直属としたが、すでに各地に進出し定着していた漢人は当該地の有力者に取り込まれ、結果的にこれが各地の戦乱を増幅させた。

かつて漢人の長であった坂上田村麻呂が実践してみせたように、もしも漢人一つにまとめて統帥統率できるならば、たとえそれが何者であろうとも、この国を治めることが可能になるだろう。さしずめ漢人は、使い次第でいかようにも変わる強力な危険な武器のようだ。

しかし「天武の詔」を絶対のものとして遵守する氏の長たちは、勅命を常に待ち望んでいる。主体的に動くようなことはせず、天皇の命に応じて初めて動くことこそが、漢人の存在意義であると考えているのだ。

したがって、直接であれ間接であれ、天皇が漢人に指令を發すればよい。ひとたび發せられれば、それまで各地の大名土豪に従っている者たちも、一斉にそれらを見限つて、天皇の元に参集するだろう。漢人は他の誰にも一切忠節を持たないが、天皇のみは別なのだ。

天武の詔によってその存在を許されたことにすべては始まるのだが、同時に天皇が現人神あらひとがみであることによつていられる。漢人は諸蕃であつて、すなわち神の子孫ではない。漢人にとつては、天皇こそが神である。しかも、唯一の現に生きている神すなわち現人神なのである。

漢人の合理的な思想は淫祠邪教の類を排するが、神聖なるものが理解できない訳ではないのはもちろんで、漢人にとつて天皇こそは唯一の神聖にして侵すべからざるものなのだ。

先行渡来の海部においても、この思想は基本的に変わらない。海部は祭祀氏族として各地に一宮を祀り、歴代の天皇を祭神として祀っている。この国の神事は、和人の中臣と、渡来の漢人の専権事である。

そして、こたび明智光秀を通じて下された勅命こそは、百年待ち望んでいた勅命なのだ。「われら漢人は、理に従い、理に生きる。渡り来たる者なればこそ、まれ人なればこそ、

信ずるものは理につきる。皇別でないのはもちろん、神別でもないわれらに、忠はない。また、誰もわれらに忠を求めない。もしもわれらが忠の姿勢をもってつかえても、心底それを信じる者はいないだろう。忠をもって天皇に仕えるのではなく、理によって天皇に仕える。この国の基はそこにある。われらは遅れてきた騎馬民族なのだ」

これは歴史に悪名を刻んだ東漢直駒の言という。平安時代に入って間もなく編纂された『新撰姓氏録』によって、左京、右京、山城、大和、河内、摂津、和泉などの京畿代における姓氏の素性が明示された。

その数一一八二氏。内訳は皇別三三五氏、神別四〇四氏、諸蕃三二六氏、未確定雑姓一一七氏である。

皇別とは天皇家から分かれた氏族、神別とは神々から分かれた氏族、そして諸蕃は渡来系の氏族である。皇別神別は神々の裔であり、諸蕃は祖先も人である。すなわち神別と諸蕃の間には決定的な違いがあるのだ。

諸蕃のうち漢系姓氏は一六三氏である。漢人の民族的な性向は不忠義あるいは打算などと言われ、これに対して和人は忠義忠節の特質をこそ称揚される。わかりやすい対比であって、一面の本質を衝いているものではあるだろう。

ただ注意しなければならないのは、そもそも和人に忠義や忠節という倫理観が根付いたのは江戸期に入ってからであって、これはひとえに朱子学に起因由来する。

朱子学は儒学の一部を日本人好みに拡大解釈して理論化体系化したものであって、日本独特のものとして発展した。

これを徳川幕府をはじめ各大名が基本理念として積極的に採用した。

結果としてそれが日本人の民族的体質となり、以後四百年余り続くこととなるが、その美徳がこの後も保持されるかどうかはわからない。

漢人は、渡来人だから忠節心が薄いという訳でもなく、民族的に合理性や効率性を追求する体質なのだとして理解すべきであるだろう。

「阿智殿は、名を捨てなされるか」佐太の長が問う。一座がざわめいた。

「阿智使主は永遠に阿智使主じゃ。何も変わらぬ」檜隅の長の高声が響いた。

「ふん、われらにとつて姓氏などというものに何ほどの意味があるか。われらの姓氏は、諸蕃の証しという以上の意味はあるまい」高向の長であった。「海部でさえ造姓によって渡来に釘付けじゃ」

「しかし彼らは神別じゃ。我らとは違うぞ」多の長である。

「この国で、諸蕃であると主張するのは、自らの生きる世界を狭めるだけじゃ。ならば、勝手に名乗るが良い。皇別でも神別でも、はたまたまったく新奇な姓氏を作り出して名乗るうとも、われらの勝手じゃ」刑部の長。

「そうでもあるまい。我ら漢人と秦の一族はそうとも言えるが、海部はどうじゃ。我らより一足早く海を渡ったがゆえに、神別ではないか」佐奈木の長。

「そつじゃ、しかも、各地の氏の長は国造となつて、一宮を奉斎してあるぞ」佐波多の長。

「あれは、すでに倭人じゃ」

「そうじゃ、やまとの女を娶つて、やまとになりきろうとしておる」

「何代も前から大和の血と混淆し、むしろ漢人としての血は薄うになつておるのではない

か」

「しかしそれなら阿智殿とて同じではないか」

「これ、何を言う」

一座が一瞬沈黙した。

おもむろに光秀が口火を切る。

「かまうな。吾の母者は和人だ。隠すつもりもない。ぬしたちは七姓に連なる古き名を守っているが、一族の多くの者は、すでに様々な姓を名乗っている。しかし明智は一族の姓として録さない。これは役名だ。天皇の命を果たすための仮の名だ。役目が終わればまた元の名に戻るもよし、はたまた別の名を名乗るもよし」

東漢氏は、三世紀から五世紀末にかけて日本へ渡来した氏族集団で、後漢・靈帝の三世孫である阿智使主を氏祖とする。これは『日本書紀』その他に明記されている。

最先端の高度な知識・技術を持ち、漢土の戦乱を逃れて高句麗に移り、かの地でもその技能によって重用されたが、日本の聖王に仕えるべく渡来したのだという(『続日本紀』他)。

東漢氏は「倭漢氏」とも表記された。元は単に「漢氏」と書いたが、河内を本拠とする漢氏と区別するために、河内は西文氏、飛鳥は東漢氏となった。

その子孫は坂上氏、平田氏、内蔵氏、大蔵氏、文氏、調氏、文部氏、谷氏、民氏、佐太氏などを名乗る。

それ以前に渡来していた秦始皇帝の裔を称する秦氏は土豪として定着したのに対して、漢氏は官人として朝廷に仕えて活躍した。

東漢氏が専門としたのは、工芸全般はもとより、製鉄技術・土木技術・建築技術・数理算術・立法・語学文筆・武術・兵法など、その知識・技能は多岐にわたり、歴代の朝廷や、蘇我氏などに重用され、勢力を広げてきた。品部の源流ともされており、古代部民制の契機となった。ちなみに後世の大蔵省は蔵部、文部省は文部に発しており、いずれも東漢氏のために設けられた職掌である。

武人も多く輩出し、後年には坂上田村麻呂が征夷大將軍に任命される。

飛鳥を中心とする大和高市郡(檜隅)が本拠地である。現在の明日香村の檜隅寺跡に鎮座する於美阿志神社は阿智使主を祀る。於美阿志とは、「あちおみ」を読み替えたものという。高松塚古墳やキトラ古墳とともに檜隅の地にあるところから、その被葬者は同族であるかと考えられる。

「目的のためには手段を選ばず」これが漢人の基本的な姿勢、体質である。それがためもあって、これまで謀略や暗殺といった政治の裏面にも深く関わることが多かった。

しかし漢人には、余人には代え難い能力があつて、それゆえに朝廷その他で重く用いられてきたのだ。決して謀略体質のゆえではない。「天武の詔」は、むしろそれを象徴的に表すもので、これまでの罪を咎めながらも罰は与えず、大赦によってむしろ能力を生かそう、活用しようとしたものだ。天皇にとつて、この一族は絶やすには惜しい者たちで、なおかつその治世に必要な能力であつたのだ。

天武以降、朝廷において東漢氏の起用が多方面で目立つようになる。坂上田村麻呂が征夷大將軍となつたために、とかく軍事能力に眼は行くが、「武」に劣らず「文」においての能力も際立っている。

ちなみに西文氏は、応神天皇の御代に渡来した一族で、王仁を祖とする。王仁は日本に「論語」「千字文」を伝えたとされる（記紀）。西文氏は呼称の通り河内を本拠地としており、主に文筆や出納などで文官として朝廷に仕えた。しかしこちらは系図もなく、東漢氏のように組織的な活動も続かなかった。

「願いの儀がござる」

改まつての言上は忍熊であった。

「わが子、光春をお連れください。」 これに控えて「ござる」

氣配を殺していたようでこれまで光秀の意識の外にあったが、忍熊の背後に大柄な若者が微動だもせず控えていた。

「文武に鍛えてござるによって、必ずやお役に立つと信じております」

「生きて戻れぬやもしれぬぞ」

「もとより承知いたしてござる」

光秀は莞爾と微笑んだ。

「ならば、吾が娘の婿に迎えよう。内裏より賜った光秀の名より一字取って、その名も秀満とするがよい」

晴明社

ところで京都堀川の晴明神社は平安朝の大陰陽師・安倍晴明を祭神とするが、その神紋は、いわゆる晴明桔梗と呼ばれる五芒星である。

光秀の家紋の桔梗紋も、この五芒星を表している。否、正しくは、五芒星まずありき、というべきであろうか。

名を変えて各種の威儀を整える際に家紋も定めたが、そこで光秀は一族に由縁の五芒星を選んだ。ところが一族の者から とくに坂上の者から異論があった。曰く、五芒星は安倍晴明のみが用いた紋であって、意図せざるにしても特定されて支障のあることもないとは言えない。ならば、五芒星を暗喩とする既成の家紋から桔梗紋を選び採用するのが良からうと。光秀にもとくに異論はなかった。

桔梗紋を用いたことから、光秀の出自を岐阜の土岐氏とする説が巷に広まったが、むろん血縁はない。妻の熙子は土岐氏の傍流の出自であったが、かなり昔に血縁は切れており、土岐氏とはいかなるつながりもない。しかし光秀は、その噂をむしる好都合として、あえて否定しようとはしなかった。

「明智殿は、土岐氏の一族じゃな。家紋は正直よのう」

したり顔でそう指摘して最初の証人を買って出たのは細川藤孝、後の幽斎であった。

「さて、どうかのう。あったから、使つておるまでだが」

「お隠しめさるな。なにしろ土岐は我らにも遠縁でな。明智殿と関わりがあったと知ればなお親しみが湧くというものよ」

藤孝は武将には稀有なほどに特に有職故実に通じていたが、それがかえって幸いした。

飯の姿とはいえども光秀も故実には一際明るく、はからずもこれより藤孝とは肝胆相照ら

す仲となつたのは奇縁といふべきか。

光秀は陰陽道は当然のこととして、漢詩や和歌にも通じていたが、藤孝はなにしろ古今伝授を受けている。古今和歌集の奥義の解釈を、さんじょうじし さねき三條西実枝より授かつたのだ。この道において右に出る者はいないだろう。

「よい師を得た。ぜひにも古今の教えを願いたい」

光秀は素直に頭を下げた。藤孝も大いに喜んだ。乱世に歌を学びたいという者はさすがに少ない。

細川藤孝は足利將軍家の有能な幕臣として活躍していたが、十三代義輝が松永久秀と三好三人衆に弑逆されるという事件が起こる。

そこで義輝の実弟である一条院覚慶を立てて足利將軍の復権を最初に発想したのは藤孝である。

この時、一時身を寄せていた越前朝倉において、これも一時身を寄せていた光秀と共に策を詰めたのだ。光秀が藤孝に正体を明かすのは義昭が十五代將軍となって間もなくのことである。

また光秀はこの使命を通じて奇しくももう一人友を得た。朝廷との繋ぎ役として特別な働きをした吉田兼見かねみである。形は山科言継の紹介であったが、もともと同族で互いにその名は知っていた。

兼見は吉田神社の宮司であるが、彼も土岐説に荷担した。

「光秀の縁者が美濃にいる」と様々な場において証言し、また後世『兼見卿記』と呼称される日記にもそれを記し、明智光秀があたかも土岐氏の流れのように世論を導いたのだ。

もつとも、美濃には鍛冶かじや土師はじの職人として同族の部民がだいたい前から住み着いているのでまんざら嘘というわけではない。しかも、兼見は「土岐」とはひとことも言わず、巷間の勝手な想像に火を付けただけである。

もともと東漢一族は謀略を得手として古代より皇族や豪族に重用されてきたことから明らかのように、世論を誘導するのは彼らの基本的な技能の一つである。

兼見は代々神道家として世に知られる卜部家、後の吉田家の当主であるが、海部が代々身に付けるべき同族の能力として、調略術とでも呼ぶべき策謀の手段を、他のいくつものとともに習得した。この分野のみで七十二の術があり、この国のこれまでの歴史の転換期には必ず陰で発揮されてきているものだ。

兼見は立場上も歴史の研究は怠りないが、己自身にもそれに連なる役割があるだろうとは幼き頃より確信していたものがあつた。だから光秀と巡り会った時には、根っからの合理気質が一変したかと思えるほどに興奮し、ある種の宿命論に与してもよいとさえ考えたほどであった。

「明智殿、ぜひにもその企みに加えてください。主上のお役に立てるまたとない機会にござる」

出会って早々に光秀がうち明けたのは、もちろん加わることを確認してのことである。

光秀と藤孝と兼見の三人が初めて同席したのは禁裏であつた。この時、藤孝と兼見は初見である。

光秀と藤孝は公家衆への根回しに幾たび目かの足を運んでいたところ、その方面の働きにかけては特に頼りとなる兼見に光秀が引き合わせたものである。ともに同年輩でもあり、

兼見もまた文芸故実に深く通じる者であるところから、すぐに親しんだ。

その日、禁裏を退出した後、そのまま兼見の誘いで吉田神社に立ち寄り、光秀と藤孝は酒肴の振る舞いを受けた。

吉田神社は貞観元年（八五九）に藤原氏の氏神として春日大社の神を勧請したのが創始である。祭神は春日神である建御賀豆智命、伊波比主命、天之子八根命、比売神の四座。当初は藤原氏が神主も務めていたが、鎌倉以降は卜部氏が代々務めるようになる。卜部氏は後に吉田氏と名乗るようになる。

「將軍家の復興に尽力できるのはまことに重畳。内裏でのこれまでの積み重ねが生かせます」

兼見が丙子で三人の杯に酒を満たし、両所に促して一気に干した。

「美酒に候」

「格別じゃな」

「下がりの御神酒にござります」

ふたたび杯に注ぎ足して、兼見は如才なく奨めながら藤孝に問うた。

「して朝倉殿はいつご上洛を」

「朝倉は動かぬ」

温厚な藤孝には珍しく吐き捨てるように言い切った。

「あれは、駄目じゃ」

「ではたれを後見に」

兼見が光秀に顔を向けた。光秀は兼見の双眸を覗き込むように一拍置いてから、おもむろに語った。

「織田に後見を頼みに参る所存だ。そのためには禁裏でのことはまとめておかねばならぬ」

「なるほどのう。弾正忠殿は財もひとときわ豊かなようやが、近頃では武辺にも名高いようで、ええやもしれませぬなあ」

この酒席へ着く前に、光秀も藤孝も吉田神社へ昇殿参拝した。先に本宮、そして大元宮である。

大元宮は、文明年間に吉田兼俱が吉田流唯一神道を創始して、その拠点として文明十六年（一四八四）、境内に齋場所として建立したものである。本殿は八角形という独特の建築形状で、延喜式内全三―三二座の天神地祇を祀る。

兼見の先導で、本宮の春日神には先に藤孝が参拝し、大元宮の天神地祇には光秀、藤孝の順に参拝した。藤孝は土岐氏であるが、藤原氏とも縁が深い。

いかにも京の町屋のお晩菜といった料理を、兼見の妻女が手ずから皿小鉢に取り分けて皆に奨める。堂上公卿でありながら、こういうところは兼見もそつだが妻女も同様にまったく屈託がない。

「京の総菜は良いのう。越前ではついぞお目にかかることもない」

元が京育ちの藤孝は、喜びを隠そうともしなかった。

「素材は海山にかなわぬが、調理に一手間かけるのが京流や。こたびの一件も、腕を振るうて、ひとつええ味出してみせまひよか」

「良い思案がありそうなのう」
 「明日にでも面白はんに会うてきまひよ。利害は一致するはずや。京の公家衆も町衆もこぞって歓迎するよう仕込むのは、そう難しいことではないやろう。ま、料理の腕前をご覧じよと言つておきますわ」

京料理は伝統的に陰陽五行を踏まえているが、贅沢か質素かと言えはむしろ質素の範疇に入るだろうし、越前朝倉や甲斐武田で振る舞われた馳走の数々に見劣りするだろう。しかし食養術の本質は陰陽と五行の相剋にある。按配によって良薬にもなれば毒薬にもなるうかという術策である。内裏の内膳と大膳も、当然これを原理原則としている。

「しかし過日の新嘗の饗膳は五色が整つておらなんだなあ。大膳においても費えの不足がおおきに影を落としておるようや」

それは光秀も聞き及んでいた。

「中納言殿より仄聞いたしたが、内膳も主上から不興を被つたとな。よほどのことであるう」

陰陽寮に居た者としては看過しがたいものがある。

「精一杯相剋には気い使うとるようやが、この乱世や。日々の魚介の手配に疎漏もあろうし、滅多なものを供膳するわけには往かんやろしな」

「陰陽もままならぬと聞いた。理を取るか、質を取るか。主上におかれては、そのようなことでお悩みとは不幸なことだ」

「不幸は日々進んでおるよしにあらしやりますぞ」

「命を縮める所業だ」

「まさかわが家へお招きするわけにもゆかぬしの方」

「親王なればともかくも、主上となつてはままならぬか」

食養術に通暁している光秀と兼見の会話に、この分野に馴染みのない藤孝はひたすら興味深そうに聞き入っていたが、この稀代の教養人が再認識したのは「食によって、人は生かされもし、殺されもする」という当然の一事であった。

清洲

清洲の城下は異常なまでに殷賑をきわめていた。

我が身をより高く売ろうと各地から蝸集してくる足軽たちと、彼らを相手に物売りをする者で日々町が勝手に膨らんでゆく。

戦場では決して聞くことのない若い女の嬌声もあちこち上がる。

国が強くなる時は、人も物も呼ばずとも来るものなのだ。

この頃の清洲城下、そしてまもなく移る稲葉山改め岐阜城下は、この国で最も活気のある場所に今まさになろうとしていた。

またこの時代、有力大名家はいずこも人材を求めており、文武を問わず能力や才覚を誇示すれば、必ずそれなりの評価は得られた。そういう意味では戦国期はそれまでの時代とは一変して、能力さえあれば出世の機会はいくらでも得ることができた。

乱世の平定されて後は急速に社会が固定して、主君替えの機会はほとんど失われてゆくことから、このわずかな期間だけが真に実力で評価を得られる時代だったとも言えるだろう。

しかも評価の対象となるのは純粹に能力のみで、忠義や忠誠心は評価とは無関係である。そういった精神性が高く評価されるようになるのは、戦国期が終わって泰平の時代になってからである。実際の戦闘がほとんどなくなることによって、兵士の評価の基準軸が大きく変わることになるのだ。

「戦をしない兵士」を評価するには、「武士道」という精神論が必要となり、したがって忠節こそが武士たる者の第一の美德とされて、もはや「二君に仕える」ことはできなくなってしまう。ここにおいては技能よりも忠節が重んじられることとなる。

これに対して、能力実力が純粹に評価される社会においては、より高い評価を与えてくれる君主のもとへ、より有能な人材が集まるのは当然であった。

そしてその第一の評価は報酬の高であり、加えてその後の出世が重要な要素となる。すなわち仕える君主の将来性に当人の運命もかかってくるということになる。

織田家はそのような列強の大家のなかでも先代信秀より資金力において際立っていたが、桶狭間の勝利によって将来性も買われるようになった。

その結果、自薦他薦とも人材が急速に集まるようになり、多少なりとも売り物になりそうな能力のある者ならば、織田家への売り込みを一度は考えて不思議はない。

しかし真に有能な人材というものは、すでにどこかに仕官しているもので、そうそう巷間に埋もれているものではない。したがって、どうしても欲しい人材は、より高い見返りを約束することによって引き抜くことになる。

光秀は、こうした状況を利用して信長との接触を図ることを計画した。足利義昭という「贈り物」を無償で手渡すとともに、自らの数ある能力のいくつかを開陳して、光秀という人材を求めさせるように謀ったのだ。尾張からも食い付きやすい情報を入れさせた。

十三代將軍足利義輝の弟、一条院覚慶が遺俗して足利義昭と名乗っていたが、彼を支援して將軍となし、天下布武のために活用する策は光秀が信長に持ち込んだものである。

義昭の腹心である細川藤孝と光秀とで十二分に検討して策を練り、しかもこの時光秀は内裏にもすでに周到に根回ししていた。信長が入洛するための舞台装置も演出も充分に整えた上での提案であった。

「この策じゃ。予が求めていたのは、まさにこの策じゃ。よう持ち込んでくれた」

信長は常になく紅潮して自ら座を立てて大股で歩み寄り、平伏する光秀の手を執った。

この時初めて光秀は信長の顔貌を間近で見たが、それは典型的な梟雄の相であった。かねて伝え聞く漢土の梟雄、魏の太祖であった曹操孟徳の人相によく似ていた。

「たれのためかは問わぬ。策に、乗ろうぞ」

信長の決断は早かった。

永禄十一年（一五六七）七月、信長は義昭を岐阜立政寺りっしょうじに迎えた。前年に木下藤吉郎が攻略した稲葉山城を岐阜城と改め、地名も岐阜とし、拠点きょてんを清洲から移していたのだ。

そしてわずか二ヶ月後の九月、信長は足利義昭を奉じてついに入京した。信長は東寺を本陣とし、義昭は清水寺を在所とした。

十月八日、信長は「禁裏御不便」に心えて、内々に一万疋を献上する。むろん光秀の入

れ知恵である。

十月十八日、足利義昭への將軍宣下があった。もちろん信長の奏請によるものである。義昭はその御礼のため二十二日に参内する。

ここに、光秀の策は大きく前進した。

十月二十四日には、公方足利義昭は信長を「父」と呼び、「武勇天下第一」と信長の功績を称え、「当家再興」を感謝した。

「のう、藤孝、上総之介殿を副將軍および管領に任じようと思うが、どうじゃろう。さぞ喜ぶであらうな。余を將軍にしてくれた礼じゃ。破格の処遇で報いようぞ」

しかし信長はこれを辞退。信長には義昭の家臣となるつもりはまったくなかった。

そして翌年二月には將軍のために二条第の建設を開始し、同時に内裏への様々な援助をおこなう。

応仁の乱以来いよいよ逼迫していた内裏の財政は、これより信長の援助によって大いに好転することになる。

信長は官位の返礼に、朝廷と公家衆の旧領を一部復活せしめた。これは応仁の乱より後の略奪によって失われていたものである。これも光秀が奔走した結果であった。

信長は自らの発想を先取りしたかのような光秀の才覚をこの一件でいたく気に入り、將軍義昭の家臣のまま、信長の家臣としても取り立てた。光秀から望んだわけではなく、信長が請うて家臣に迎えたものだが、こうなることは光秀の緻密な計画のうちにもるん読み込まれていたものだ。

足利義昭を担いで上洛を、との光秀の提案に信長は即座に応えた。

「申すことやよし。さよういたすによって、引き換えに、わぬしは予に仕えよ」

これに対して光秀はしばし躊躇してみせた。

「光榮至極に存じそうらえども、吾は足利の家臣にござりまする」

すかさず信長が提示したのは新参には破格の五百貫文であった。しかも足利將軍家の家臣であるまま織田の家臣となるのを認めるという特別扱いである。

光秀の狙いは的中した。織田家と昵懇の山科言継卿により家中の事情はおおむね知り得る立場にあったが、とくに文官が不足していたのだ。柴田勝家などの譜代の重臣のほとんどは戦働きにしに役に立たない。ただひとり羽柴秀吉が調略と計数に関わっていたが、調略はともかく計数は光秀と較べれば見識にも等しい。

まして上洛ともなれば、内裏や公卿との交渉が不可欠となる。これは単なる交渉ではなく、有職故実や詩歌管弦の知識までもが必要となる。こたびの一件で、光秀の能力はいやが上にも信長の知るところとなったのだ。

光秀にとつてはこの程度の謀り事など容易いものであったが、狙い通り信長は食いついた。もしも通常の人材募集に応募しておれば当然の手続きとして氏索性や前歴を問われたらだろうが、君主自らの求めに応じるのであるから誰も正体をとがめない。策略の第一歩はまんまと成功した。

しかし光秀の重用は必ずしもこの一件の功績ばかりでもないようだ。

信長と光秀は気質に共通するものが多くあったようで、様々な策を言上する中で信長は光秀の才能を見出していったようだ。とくに合理性と効率性を徹底的に訴求すること、また規範をおこなうのに極めて冷徹であること、そして人としての情に薄いことは共通の資

質である。

しかもこれらは信長の他の家臣には得難いもので、信長としても強く共鳴するものがあったのやもしれない。

「わぬしはおもしろい考え方をする。予のやりかたと似ておるぞ」

天下布武の構想について下問あった際に述べた光秀の見解を、しばらく黙って聞いていた後で信長はそれだけ言ったのだ。その見解とは、「幕藩制」である。後に徳川幕府によって実践されることになる。

入京して宿所を定めて、光秀は真つ先に堀川の清明神社に参拝した。

「ご帰京、おめでとうござりまする」

出迎えたのは土御門久脩である。ようやく十歳になったばかりの安倍家の当主で、普段は若狭の山奥に留まっている。この日は光秀からの連絡であらかじめ上京し、待ち合わせたものだ。離れたところに久脩の従者が二人控えている。そのうちの一人はおそらく守り役である。

「しばらく見ぬ間に大きゅうなられた」

「阿智さまはすっかり陽に焼けて、なにやらたくましくなりましたような」

光秀は久々に笑った。愉快であった。

「修行は、ぬかりないか」

話しながら本殿へ向かう。

応仁の乱よりこの方、境内はすっかり荒れ果てて、務める神主もなく無住となっている。それでもこの日ばかりは光秀と久脩が昇殿参拝するために、安倍の家人によって浄められていた。万全とは言い難いが、神前に燈火も灯し、神饌も供えられている。

光秀が本殿の正中を避けて階段に爪先を掛けたその時、殺気が走った。抜きはなった白刃を構えて走り寄る男の姿が視界の隅にとらえられた。

光秀は即座に身を沈めて白刃を鉄扇で受け、すかさず鎧通して相手の脇腹を突き上げる。脾臓から肺腑、心臓まで貫いているはずである。捻るように抉って引き抜くと鮮血がわずかに飛び散った。一連の動作は無言のうちに瞬時に終わった。それぞれの従者たちが走り寄った時には、その男はすでにこときれていた。

「何者でござりましょう」

「敵が多い。詮索しても無駄であろう」

「忍び装束から察するに、もしや我らの同族では」

「漢人といえども、一枚岩ではない。目先の利益を守るうとする者には、吾のなさんとすることは脅威となるう」

袖口に付いた返り血を従者が拭おうとするが、光秀はそれを制した。

「御神前を血で汚してしまったな」

血染めの上衣を脱ぎ、従者の狩衣と代えて着替え、もはや何事もなかったかのように本殿へ上がる。しかしその後に従う久脩は青ざめて、竦み上がっているようであった。安倍家の当主として幼時から陰陽道の薫陶を受けているが、武のたしなみはまったくなく。こういう場面に遭遇すると、ただのひ弱な年若い公卿である。

光秀が斎主となって参拝し、下がり口であらためて安坐にて向かい合った。

「久脩殿にはおいくつになられた」

「ようやく十歳にございます」

「三年経つか」

久脩が七歳で初出仕した時には、光秀すなわち当時の阿智桃丸は三十一歳であった。すでに天文博士であり、陰陽師としても抜きん出た才能を發揮して、陰陽寮の復興を囑望されていた。

しかし主上直々の特命による御役目で内裏を留守にすることが多く、久脩が直接教えを受ける機会はほとんどなかった。それでも数少ない機会にいくたびか、貴重な教示を得ている。いつかゆつくりと教えを受けたいというのが、久脩のたつての願いであった。

「陰陽寮にはこの後行かれまするか」

「いや、行かぬ。 もう行くことはないやもしれぬ」

「え、それはまた、なにゆえに」

久脩の面上には隠しようもないほどの落胆が表れていた。責任ある立場にあるといっても、まだ十歳にすぎないのだ。

「主上のお役目を果たしおることは承知しておるうな」

「どのようなお役目かは存じませぬが、重きことのみは」

「いずれ知る時もあるうが、今は知らぬほうがよい。いずれにせよ戻れぬ道でな。しかも血塗られた道だ」

「もつといろいろ教えを受けたくございます」

俯き加減の久脩の頬に涙が一条伝っていた。光秀とは別の意味でこの久脩にも重い責任が待っている。

「数年内には、こなたは陰陽頭に任せられるであろう。寮の先行きは、すべてこなたに委ねられるのだ」

「どうぞ、お助けくだされませ。とてもものに荷が重うて、とうてい一人では背負いかねます」

「本来の陰陽道を究めよ。天文道のみにては不可。曆道のみにては不可。二つを一つとして究めてこそ、初めて陰陽の原理、五行の真理が明らかになるのだ。それがこなたの使命だ」

安倍家が天文道、賀茂家が曆道と分けて伝えることとしたのは、賀茂保憲かものやすのりがおこなったことである。

安倍家の実質的な祖ともいえる安倍晴明は、陰陽師としての才能が際立っていた。しかしその根幹は天文道によるものであって、これに対して、晴明の兄弟子であった賀茂光榮かものみつよしは曆道による陰陽師であった。

これは彼らの師である賀茂保憲が、実子の光榮と、最愛の弟子・晴明とをいずれも否定しがたく、伝えるべき陰陽道を二人に分け与えたことに基づいている。

そのため安倍（土御門）家は天文道を、賀茂（勘解由小路かでのこうじ）家は曆道を専業とすることになる。しかしこのことは、結果的にその後の陰陽道を限定して方向付けることとなり、最終的に衰亡する要因ともなった。

陰陽道は本来、天文・曆・地理・その他の総合によって世界を読み解く原理であって、これがはたして「分業」で成り立つものかどうか。たとえ一道を究めても、それ以上の何

ものかを認識することはできないだろう。

その結果、天文は天文でどこまでも高度に精緻化して行き、地理は地理でひたすら厳密化して行き、ただそれだけの技術になってしまった。

晴明も光栄も、片方だけの博士であったが、総合的に修学していたのは当然である。そしておそらくは、自らの子にもそれだけのことは教え伝えたに違いない。

しかしそれ以後は、残念ながら自然に「分業」のままに継承されて行ったことだろう。

本来は天文道・暦道ともに修学し、総合する力がなければ陰陽師はつとまらない。

「陰陽の道とは、森羅万象の原理と真理を究める道。これを忘れてはならぬ。吾が往く血塗られた道も、天下の理を究めるもう一つの道だ」

光秀はそう言つと踵を返して鳥居へ向かった。久脩の足音は聞こえなかった。

その様子を密かに窺う視線があった。

境内に接する屋敷の一つ、界限では「茶碗屋」と通称される田中宗易（そつえき）の住まいである。

宗易は信長の御茶頭となってまもなく、京の屋敷をここ堀川に設けた。大徳寺門前でなく、こちらを選んだのは、かねてよりの思案であった。参道の一条戻り橋は晴明公以来の謂われがある。血のなせる業と言つてもよい。

「血塗られた道とは言い得て妙。茶の道もまさに同じやな」

板障子の蔭で呟いたのは宗易その人であった。気配を殺している佇まいを知らば、おそらく誰もただの茶人とは思わないだろう。傍らには忍び装束の者が控えている。

「宗一、わいは出かけるよつてな。とくに動きもないやろつけど、念のため見張つとき」